

Vol.63

院長 関の

Face to Face

2013年9月1日発行



五感とは、動物やヒトが外界を感知するための多種類の感覚機能のうち、古来からの分類による5種類、すなわち視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚を指す。しかし学問的には、感覚には少なくとも9種類はある。と大方認められており、細かく分類すれば20余りある。とする説もある。例えば「触覚」は、生理学的には体性感覚と呼ばれるものにはほぼ相当するが、体性感覚は決して単純

「触覚」を鍛えよう



に皮膚の感覚を脳に伝えるものではなく、表在感覚(触覚、痛覚、温度覚)、深部感覚(圧覚、位置覚、振動覚)、皮質性感覚(二点識別覚、立体識別能力)など多様な機能を含んでいる。それ以外にも感覚には内臓感覚、平衡感覚などが存在する。さて、私達施術者はあらゆる感覚が必要ではあるが、中でも「触覚」は欠かせない。皮膚や筋肉の萎えた感じ、逆に緊張している感じ…、

柔らかい、硬いなど瞬時に見分けることが治療において要求される。

「触覚」を鍛えるためには普段からの鍛錬も大切で、人体だけでなく様々な「モノ」を触らなければならぬ。本や辞書など電子で見えても「紙」の感触はわからない。服であっても画面で見ただけでは「布地」の感触はわからない。モノの良し悪しを見分けるためにも「触覚」は大切な情報元である。鍛えるには様々なモノに触れること。是非心がけて触れていきたいものだと思う。

関 修一(せきしゅういち)

健育会 東銀座整骨院・鍼灸院・
整体院 院長

代替医療の総合治療院としての確立を目指す

タイトルの「face to face」は「患者さん自身と向き合って患者さんの症状と闘う」ことを願ってつけた

* 毎月1日の発行です